

視察等報告(復命)書

三次市議会議長 様

報告者氏名 黒木靖治

下記のとおり、視察が終了したので報告します。

視察議員	(会派:公明党) 黒木靖治・中原秀樹、(明日への風)徳岡真紀
期 間	令和6年1月10日(水)～令和6年1月11日(木)
視 察 先	・千葉県いすみ市役所
視 察 用 務	・有機農業の取り組み
視察先対応者	・いすみ市農林課 [REDACTED] 課長、 [REDACTED] 主査、 [REDACTED] 議会事務局 局長
概要及び所見	<p>【いすみ市の概要】</p> <p>・人口 35,65人 ・世帯数16,939世帯 ・面積157,50km²</p> <p>※九十九里平野があり良好な漁場があり、イセエビやタコ、ヒラメなど豊富な海の幸。</p> <p>(いすみブランド)・いすみ鉄道・外房大原はだか祭りが有名。</p> <p>いすみ市が有機農業に取り組み始めたきっかけは、2010年に豊岡モデルの存在を知り、いすみ市の水稲産業の不振に豊岡モデルが有効ではないかとの着想を得られて、2012年に自然と共生する里づくり連絡協議会設立。公民協働で環境保全型農業連絡協議会を設置し、地元水稲農家、JA、県改良普及課、市農林課が事務局。</p> <p>以来、協働で有機農業を推進。栽培技術は外部講師を招聘し向上した。</p> <p>地産地消として、学校給食への提供(米価格の安定)をファーストステップとして、生産量を高め地域内で販売をして有機米としての認知度を高め、地域外への販路を拡大。地域ブランドとして地域に愛される存在となり、地域外へのブランド戦略を図っておられる。学校給食が抜群のイメージとなり、内外とも宣伝効果が大きい。</p>

【 所 見 】

[目的と成果]

- ・子ども達へ、安全・安心な食の提供。
- ・食の安全保障の問題、ローカルとグローバルを結び、食や農の問題の根源がどこにあるのか。
- ・日本の食が輸入に依存、食品添加物や残留農薬問題、環境や生物多様性との関係。
- ・市民からの評価が高く、農家の意欲の向上と安定した販路確保。
- ・地域で有機農業を広げるため、学校給食という公共調達を上手に活用。
- ・市民から有機米の量を増やして欲しい要望。
- ・移住者の増加など。

◎自然と共生する里づくり連絡協議会の一員として県やJAと協働しておられ、いて、特質すべきは、JAが有機米販売に不得意な分、市が販売開拓や販売支援(市の独自認証)を行なっている。

◎水稲は、将来100haを目標とされている。また、野菜は、見本といえる模範的農家を育てていない。(10人増えたら産地形成ができる)

昨年10月5日に視察した兵庫県豊岡市もいすみ市においても、市の農業に対して本気になった人(市・JA・県)の職員がいてこそその取り組みだと感じています。三次市においても、農業にかぎらず各分野での本物の人材育成が重要だと痛感しました。

有機農業の取り組みは、一朝一夕にできるものではありませんが、世界の流れとして有機農業の時代は来ると思います。

市・JA・県・生産者が一体となった取り組みを考えて行くべきだと考えます。

視察等報告（復命）書

三次市議会議長 様

報告者氏名 中原 秀樹

下記のとおり、視察が終了したので報告します。

視察委員会	会派 公明党
期 間	令和6年 1月11日（木）～ 令和6年 1月11日（木） 1日間
視 察 先	千葉県 いすみ市
視 察 用 務	「有機農業の取り組みについて」
概要及び所見	<p>【概要】</p> <p>千葉県いすみ市は、房総半島南東部に位置し人口約36000人のまち。都心から70Km圏内に位置しており、開発から影響を逃れたことで希少生物も多く生存し、自然の恵みと豊かな里山・里海地帯である。近年では世代を問わず移住者に人気のまちとなっている。</p> <p>いすみ市における有機農業推進の経緯は2012年にコウノトリで有名な兵庫県豊岡市をモデルに「生物多様性」と「水稻」の2部門で協議会を設立している。当時は有機農業者0人であったが、二年後には民間の稲作研究所を作り、県の普及指導員、JA、市が連携してくれるようになった。3年後から生産された有機米4tを学校給食に導入し5年後からは学校給食の全量にあたる42tの有機米を提供できるまでに拡大された。</p> <p>いすみ市の学校給食センターは、センター方式で東洋食品に委託している。</p> <p>児童生徒数は 令和5年度 小学校 1313人（小学校 9校） 生徒数 752人（中学校 3校）</p> <p>年間有機米導入日数 160/199日</p> <p>2017年の10月から有機給食を本格的に始めてから、ごはんの残食が減っていき、給食全体の残食も年々減少に繋がっている。大変おいしい給食として子供からも喜ばれている。</p> <p>”学校給食需要をとおして有機米産地をつくることを目標”</p> <p>①学校給食全量米42tを供給するためには、10ヘクタール以上の有機水田が必要であった。</p>

②10～15人の有機農家が必要であったため、育成を進めた。

※有機給食のねらいは、ベテラン農家の生きがいと新規・若手農家の生業。

少ない生産量でも農家が無理なく生産意欲の高い農家になる仕組みづくりをめざしてきた。

【所見】

今回、いすみ市で有機農業の取り組みについて学びました。始めたきっかけがコウノトリで有名な豊岡市であったことに驚きました。昨年の秋に自分も会派で豊岡市で自然を大切にしたい環境保全型の農業を勉強しました。自然環境を味方につける大変さ、前例のない事への挑戦。計り知れない努力があったと思いました。

いすみ市は、海と平原に覆われた地域で海産物や、サーフィンなどが盛んで移住者も増えていると聞き、あちこちで海の家があり夏は沢山の観光客も来られると感じました。

いすみ市は、水稲不振にコウノトリモデルが有効ではないかと考えたと思いました。着想された方は勇気があったと思いました。普通の農業ですら生計を立てるのは困難ですが、JAや市行政課のメンバーや県普及員などが連携して取り組まれたことが本当に大きかったと感じました。

また、子どもの学校給食へ絞り込んで生産をされたことで、安定した需給が確保できたと感じた。

いすみ市の総合的な学習では「田んぼと里山と生物多様性」を学ばれていて、小学生時代から食の大切さを身に着ける取り組みは本当に素晴らしい。子育て世代も安心して食べられる野菜やお米は、三次市でも大切なことだと思いました。

有機農業は、水管理はもちろんのこと土づくりが一番大切だと伺いました。三次市でも未来の食卓を支えられるように、農業を支えていきたいと感じました。